

# 曾我物語図の図様分類—図様の定型化と受容を中心に

大阪芸術大学 美術学科 教授 河田 昌之

中世に生まれた軍記物のなかで、現代においても歌舞伎で演じられ人口に膾炙している作品に「曾我物語」がある。鎌倉時代初めに、曾我十郎祐成と五郎時致が富士の巻狩りに乗じて父の敵工藤祐経を討ち取る内容である。史実を基盤にしてはいるものの曾我兄弟による敵討ちは私的で小規模なものであるが、味方が少ない主人公が、劣勢のなかで活躍し、敵討ちの本懐を遂げ、その後、捉えられて死するという主人公の生き様は、法師や説教師たちによって各地に伝えられ、その物語に共感する者を増やしていった。口承流伝した話は読み物にまとめられ、絵画化もなされ屏風などに描かれた。

曾我物語の研究は写本が多く伝わる国文学で早くから取り扱われたが、絵画史における研究はこの物語を題材にした扇面画や屏風絵が数点知られる程度であり、国文学に比べると立ち遅れていた。ようやく近年になって、この物語を描いた画格の高い屏風が新たに発見され、論考の発表や展覧会での展示もなされるようになった。それによって、ストーリー展開への興味とそれを絵師がどのように表現したかに寄せる関心などから、画題としての意義や制作の背景、また描いた絵師への研究につながってきている。

申請者は近世やまと絵研究の一環として土佐派や住吉派の作品調査を継続しているが、そのなかで桃山時代の土佐派を代表する土佐光吉の筆になる「曾我物語図屏風」(渡辺美術館蔵)の調査をとおして、光吉を特徴付ける源氏物語絵とは別趣の高い完成度を示していることを実感した。調査を進めるなかで、絵師は特定できないが人物や樹木などに土佐派の画調を示す作品として注目したのが江戸時代前期の「曾我物語図屏風」(林原美術館蔵)である。未研究の作品で、事前調査によって、ほぼ同じ図様の狩野派による「曾我物語図屏風」を山梨県立博物館が所蔵していることがわかった。

林原美術館本は、「富士の巻狩り」と「その夜の仇討ち」の二場面を左右隻に分けて6曲1双に構成する。「曾我物語」を描いた屏風絵は先行研究(井澤英理子「曾我物語図考」『日本美術襍稿』平成10年ほか)で紹介された9点はいずれも二場面構成になっており、この形式が「曾我物語図屏風」として流布していたことを示している。

本研究で対象とした林原美術館本は、渡辺美術館本とともに9点中に含まれていないが、山梨県立博物館本は同別本とされている作品に該当する。申請者は両本に共通する粉本の存在などについてすでに林原美術館での講演会で概略を述べた(「物語絵林原コレクション」2020年8月23日)。今回の研究では、林原美術館本を山梨県立博物館本と図様の細部について比較検討することで、林原美術館本の特徴が明確になることを目指した。さらに、絵師を推定する手掛かりとして土佐光吉の作風との関連をたどることによって、土佐派による絵画制作との繋がりの可能性が想定できるかどうかを試みた。結論には至っていないが、やまと絵の正系絵師による関与が見出せれば、土佐派の作画範囲や図様の伝播を考える上で新たな視点となる。

コロナ禍対策の状況下では調査が制限され、当初の研究計画は変更せざるを得なかった。林原美術館本は昨年秋にサントリー美術館の特別展「刀剣 もののふの」で公開された。また山梨県立博物館本は岩佐派の絵師による作品とともに本年1月に保存修理後の初公開が行われた。いずれも展示ケース内に陳列された状態であったが、細部図様の表現と作風の特色があらためて確認できた。岩佐派の作品との比較により、やまと絵絵師による「曾我物語図屏風」がアレンジされ流布する様相も見てとれ、定型化した図様の展開を再考する機会となった。そのなかで唯一調査ができた関連資料に、「曾我物語」に範を置く幸若舞の新出本「十番切絵巻」(個人蔵)がある。その他、「曾我物語図屏風」と西本願寺白書院の「韃靼人狩猟図襖」に代表される漢画系の狩猟図の構図や表現との関連は、先行研究(三戸信恵「曾我物語図屏風に関する一考察—新出本と渡辺美術館本を中心に—」『国華』1496号・2020年ほか)を林原美術館本、並びに山梨県立博物館本にも敷衍できるかどうかの検討を含めて今後の課題とした。